

翻刻

小津与右衛門宛円山主水(応立)書簡一通

菱岡憲司

三重県立図書館デジタルライブラリー「文学」80に公開されている「円山応立書簡」一通を翻刻する。

宛先は小津与右衛門(一八〇四〜五八)、桂窓と号する小津久足のことである。小津久足については、拙著『小津久足の文事』(ペリカン社、二〇一六)『大才子小津久足』(中公選書、二〇二二)を参照されたい。

差出人は「円山主水」であり、そのため三重県立図書館は「円山応立書簡」と判断している。しかし宛先は、同家で初めて与右衛門を称した三代の理香(一七五八〜一八〇八)ではなく、六代の久足であり、久足が通称を新蔵から与右衛門に改めるのは天保十四年(一八四三)十二月であるため、差出人は応挙(一七三三〜九五)ではなく、応立(一八一七〜七五)である。また、書簡の年代は、まず天保十五年(弘化元年、一八四四)から久足の死去する安政五年(一八五八)の間と絞り込め、さらに文中の「四月展観」は、後述するように、天保十五年のものだと考えられるため、書簡は天保十五年二月十三日と推定される。

久足は、応瑞・応震・応立の円山家三代と交流があり、両者の取り交わした手紙から、応挙画の鑑定や購入の仲介、作画の発注などが確認でき、久足が京に赴いた折には円山家を訪問している(拙稿「小津桂窓宛円山応震書簡一通」『雅俗』二〇、二〇二二)。同「小津桂窓書簡と近世後期の文化交流について」『語文研究』一三七、二〇二四。同「円山応震の鑑定書と割印」『雅俗』二四、二〇二五。拙著『大才子小津久足』前掲)。今回の翻刻も、そうした交流の一端が垣間見える書簡である。

ここで、書簡中の「四月展観」について述べておきたい。応挙が没したのは寛政七年(一七九五)七月十七日であり、五十回忌は没年から満四十九年目におこなわれるため、天保十五年がその年に該当する。

応立は、天保十五年三月四日に応挙五十回追福の展観会を催している。その

ことに関連した書簡を松阪市郷土資料室が所蔵しており(弘化元年五月六日付・小津与右衛門宛円山応立書簡、田中繁三収集小津与右衛門家文書73-18)、拙稿「小津桂窓書簡と近世後期の文化交流について」(前掲)に翻刻を掲載した。該当箇所の説明を拙稿より引用する。

応立の催した展観会のこと、山本榕室編の日録『日省簿』のうち、天保十五年三月四日の条に「四日。雨。与秀夫・章夫。至円山正阿弥、見源琦・南岳・応挙三先生追善展観」(『忘算竊記』五五-一三六、西尾市岩瀬文庫所蔵)と見出せる(このことは杉本欣久「鯉図屏風」と画家・渡辺南岳について」『古文化研究』七、二〇〇八)に指摘がある。すなわち、天保十五年三月四日に京都円山の安養寺の塔頭・正阿弥にて「源琦・南岳・応挙三先生追善展観」として開催され、山本榕室も観覧に赴いたことがわかる。

この三月四日の展観には、久足の知己・川喜田遠里(一七九六〜一八五二)の息石水(一八二二〜七九)も訪れており、石水による旅日記『旅窓漫筆』(石水博物館所蔵、13-01)の天保十五年三月四日の条に「未の頃より丸山正阿弥に応挙うしの年回にて展観のありければ、立よりて一覽ス。見るにたとへがたし」(源琦・南岳の画いたくあり)との記述がある(早川由美氏ご教示)。

そして久足は、同年の紀行文『志比日記』において、その展観の様子を詳細に記録している。拙著『大才子小津久足』(前掲)でも一部引用したが、やや長文になるものの、ここでは三月四日の条の全文を引用すると、以下のとおりである。

四日。雨ふる。

けふは円山に展観会ありとかねてきければ、そをみにものすとて、知恩院のうちをすぐるに、さくらはおほかたちちりて、猶のこれるも、けふの雨にたへず。

ちる花の雪は雪にてふる雨のしづくまぎれぬけふのこのもと

円山にいたれば、門の柱にそのよしかきつけて、正阿弥といふにてその会あり。こは中島来章といふ画工が、その師、渡辺南岳の廿七回忌の追慕にもよほせるよし。そのちなみに円山応挙・駒井源琦が画をはじめ、その南岳が画をもあまたかけつらねたり。

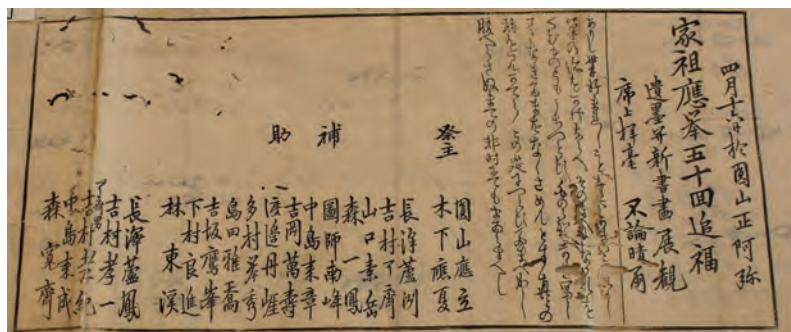
応挙の画は、近來の名人なることは、今さらいふも中々におろかなれど、その画風のあつく深切にして、人をあざむかず、たくみのよにぬけいでたるを、われふかくこのめり。英雄人をあざむくの大くひは、すべてわがとらざるところ也。いはんもおそれあることながら、光格天皇・今上天皇、御ふたかたともに、いたく応挙の画をこのませ給ふよし、豊岡大藏卿殿にうけ給はれることあり。さる御あたりにもこのませ給へるにても、名画はしるきを、なまさかしらに、からぶりこのむなま画工が「俗画也」などあざけるは、かたはらいたきことぞかし。

けふか、げたる画どものうちには、めにとまれるがなきにあらねど、とりたていふべきほどの画もなく、中には偽筆とおぼしきも見ゆるはいぶかし。今すこしあなぐりもとめなば、あまたなるべきに、かずおほからぬは、あつめやうのままやかならざるかとおもへど、今世にては品たかければ、所蔵せる人の軸のそこなはれんかと恐しもあるべく、又まことのすきといふものは、さばかり人に見するをよるこばず、ひとりたのしむものなれば、かた／＼あつまりがたくこそありけめとおもひなさる。南岳・源琦の画どもは、めでたきも中に見ゆ。すべて田舎にては、ひとめに見がたき佳会にて、後のおもひでもなりぬべくや。

右の記述から、この展観は、渡辺南岳二十七回忌のために中島来章が催したもので、それにかこつけて、併せて円山応挙・駒井源琦の画も集めたことがわかる。

一方、この「源琦・南岳・応挙三先生追善展観」とは別に、応立が中心となり、四月十六日に応挙五十回忌の展観を催したことが、石水博物館に残る「家祖応挙五十回追福遺墨并新書画展観」（石水博物館所蔵、反12・59）の一枚刷より確認できる。

まず「四月十六日於円山正阿弥／家祖応挙五十回追福／遺墨并新書画展観／席上揮毫 不論晴雨」と記したうえで、「ありし世に好まれしと□□□かきの□□□し筆の跡をかけならべ、そのまへにながれをくむものどもうちつどひ、



もの、かたかき写して、なきたまをなぐさめんとす。真との跡を見がてら、この筵につどひたまへかし。腹へらさぬまでの非時にてもまぬらすべし」と述べ、祭主として円山応立・木下応夏の二人、補助として長沢蘆洲・吉村了齋・山口素岳・森一鳳・凶師南峰・中島来章・吉岡万寿・渡辺丹崖・田村孝秀・島田雅喬・吉坂鷹峯・下村良進・林東溪の十三人、一行空けて長沢蘆鳳・吉村孝一・吉村孝紀（了齋男）・中島来成・森寛齋の五人が名を連ねている。

さらに、石水博物館には、「天保十五年七月円山応挙五十回忌展観目録」（石水博物館所蔵、78・59。次頁画像掲載）という一枚刷も残っている。その文面から、天保十五年が応挙の五十回忌の年にあたるため、応立は、七月十七日の命日に先立って、あらかじめ四月十六日に遺墨を円山勝興庵（正阿弥）で展観することで祭奠とし、その目録を作成して多くの人の閲覧に供したことがわかる（今茲天保甲辰年七月十七日。值家祖応挙五十回忌辰。預於四月十六日展観遺墨於円山勝興庵以充祭奠。因録其目於左以具大方之覽。円山応立謹白）。また、同じく四月十六日に、当代絵師による新作書画およそ二百点も、やはり安養寺内の塔頭である左阿弥で展観され、その目録を出すつもりであることが確認できる（諸名公画伯所賜之新書画凡二百余。同日於左阿弥楼上展観焉。其目当嗣出）。

以上を勘案すると、拙稿「小津桂窓書簡と近世後期の文化交流について」（前掲）では、弘化元年五月六日付・小津与右衛門宛円山応立書簡で言及のある展観を、誤って三月四日の「源琦・南岳・応挙三先生追善展観」を指すとしていたが、正しくは、この四月十六日の展観であった。お詫びのうえ訂正したい。

この五月六日付書簡から、四月十六日の展観開催に際し、久足は応立に香奠百疋を贈ったことが確認でき、また応立は展観後、御所御絵御用を仰せつけられ

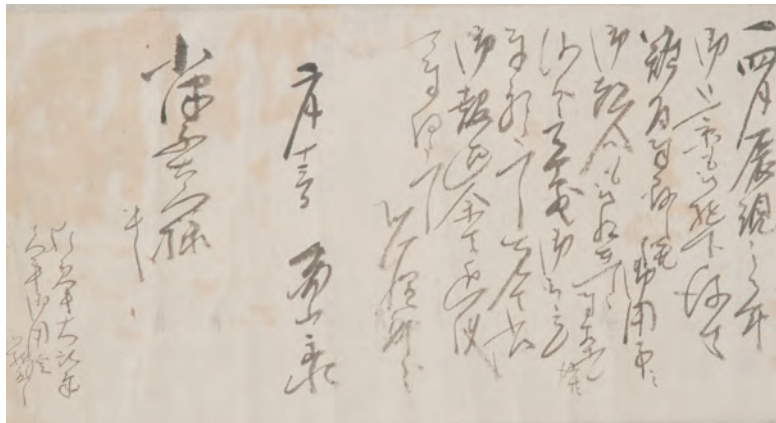
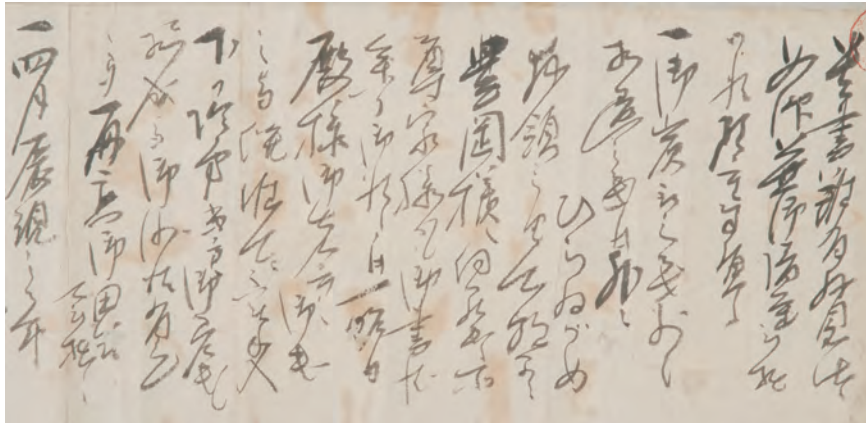
今皇天保甲辰年七月十七日植  
家祖應舉五十四忌辰預於四月  
十六日展觀遺墨於圓山勝興菴  
以充祭奠因錄其目於左以具  
大方之覽  
圓山應五謹白

後成御後 彩色 絹 豎幅  
富士山之圖 墨畫 紙 橫幅  
大瀑布 若川新藤有画仙紙 豎幅  
竹里館之圖 淡彩色 絹 豎幅  
水鳥 彩色 全紙 雙幅  
關帝之像 寫真彩色 絹 大橫幅  
雲龍 墨畫 全紙 豎幅  
布袋 全紙 豎幅  
白瀧 淡彩色 絹 豎幅  
鯉魚 熟竹若藤畫 大橫幅  
寒山拾得 全紙 大橫幅  
寒山竹狗子 淡彩色草書 全紙 豎幅  
水邊遊鶴 墨畫 半切 豎幅  
野馬 行體墨畫 熟紙 橫幅  
三番叟之圖 墨畫 全紙 豎幅  
虎 墨畫 全紙 豎幅  
早春梅溪之圖 彩色 絹 豎幅  
晚秋嵐山之圖 彩色 絹 豎幅  
行花翁之圖 墨畫 紙 豎幅  
燈臺化物 半切 豎幅  
大體蘇村應舉席上戲遊之像 墨畫 橫幅  
雲龍 墨畫 絹 橫幅  
雪中老松 墨畫 熟紙 墨畫 墨畫 橫幅  
寒山拾得 墨畫 半切 豎幅  
暮光 墨畫 絹 豎幅  
山中月夜 墨畫 絹 橫幅  
半身鐘塔 墨畫 半切 豎幅  
旭三竹 墨畫 絹 橫幅  
綾羅堆 彩色 絹 橫幅  
後赤壁之圖 墨行體 紙 豎幅  
排大郎之圖 寫真彩色 熟紙 豎幅  
嵐山中掉筏之圖 小景墨畫 熟紙 橫幅  
轉入水之圖 刷書 絹 橫幅  
鐘 行體 小切 豎幅  
月前枯木寒鴉 水墨 絹 豎幅  
海邊松鶴 試筆墨畫 半切 豎幅  
寶珠之圖 金泥書 絹 橫幅

目錄

諸名公畫伯所賜之新書畫  
九二百余同日於左阿彌  
樓上展觀焉其目當嗣出

神皇皇后行宮地天皇之圖 圓山應春  
楓樹草雀之圖 彩色 圓山應震  
右故社中遺墨本寸屏風 抽畫 十二枚  
雪中寒菊鴛鴦 同 真女 鳴  
芦鴨 同 木下 應受  
雁 同 山口 素絢  
孔雀 同 森 徹 山  
青楓鳩 同 圓山 應瑞  
朝白草雀 同 長澤 甚盛 雪  
藤雲雀 同 吳月 溪  
新茶子規 同 僧月 僊  
山櫻雉子 同 龜岡 規禮  
桃雞 同 山跡 雀嶺  
紅梅雀 同 駒井 源琦  
新柳鶯 彩色 絹 本吉村 開洲  
半身唯摩摩 行體墨畫 熟紙 豎幅  
全身 戒行 半切 豎幅  
全身 壹行 半切 豎幅  
行書 壹行 半切 豎幅  
春景兩之圖 紙 豎幅  
墨梅之圖 紙 大豎幅  
月前之雁 全紙 豎幅  
半身達摩之圖 淡彩色 真畫 紙 豎幅  
全新樹之圖 墨畫 絹 豎幅  
山家多喜之圖 墨畫 絹 豎幅  
三原富生之圖 墨畫 大橫幅  
雙雀之圖 全紙 豎幅  
古蕉雞 淡彩色 全紙 豎幅  
鴨之圖 彩色 絹 豎幅  
藤王閣之圖 寫真 絹 豎幅  
西湖之圖 寫真 熟紙 橫幅  
墨竹 半切 豎幅  
早藤雲雀 淡彩色 絹 豎幅  
松風虎圖 寫真 彩色 絹 大橫幅  
松下水鳥 彩色 絹 大橫幅  
孟宗之圖 淡彩色 絹 大橫幅  
蘆雁 水墨 全紙 豎幅  
梅山鶻 山水 墨畫 絹 豎幅



て諸事とり紛れたため返答が遅れたことを謝しつつ、展覧録ができたなら送ることを約して、それに先立って「当日相集り候遺墨並二新書画」を抄出して示している。ここでいう展覧録が、おそらくこの「天保十五年七月円山応奉五十回忌展覧目録」であろう。また、五月六日付書簡に見出せる「豊岡様」とは、桂窓も懇意の公家豊岡治資<sup>はるすけ</sup>であり、今回翻刻した二月十三日付書簡にもやはり言及がある。

光格・仁孝両天皇が応奉画を好んだ影響もあり、円山家は、宮中に出入りして豊岡治資のような公家とも親しくし、一方で久足のような商人からも応奉画購入の仲介を頼まれ、作画の発注を受けている。雅俗どちらの場にも身を置くことができる絵師という身分を活かして、公家とも商人とも親しくし、両者を

つなぐ。そのひとつのあらわれが、豊岡治資と久足との直接的なやりとりであるといえ、そうした雅俗交流の結節点たる絵師の果たした役割の大きさが今回の資料からうかがえよう。

凡例

- 一、三重県立図書館デジタルライブラリー「文学」80「円山<sup>（応立）</sup>書状」一通を翻刻した。
- 一、読解の便宜を考慮して、適宜、句読点・濁点を施した。
- 一、漢字は常用漢字を原則として通行の字体を用いた。

（表紙、別筆）「昭和二十九年八月八日／武藤和夫<sup>†</sup>装」

貴書難有拜見仕候。如仰益御清栄被遊御座、珍重奉賀候。

一、御炭取之義、少々相違之義二付、外二ひらゐがめ<sup>†</sup>拜領之由、今般早々豊岡様へ伺罷出候所、尊家様よりも御書状参り御座候二付、一昨日、殿様御先方へ御出之旨、併唯今二不被手入、下り次第、当方へ御差出し可相成旨、御沙汰有之候与、再応御思召可被遊候。

一、四月展覧<sup>†</sup>之事、御上京も被遊下候得者、難有奉存候。併御用事之御都合も被為在候と奉察候得共、何分宜敷御取立奉願上候。先者右御報迄、余者近便可奉同上候。恐惶謹言

二月十三日

円山主水

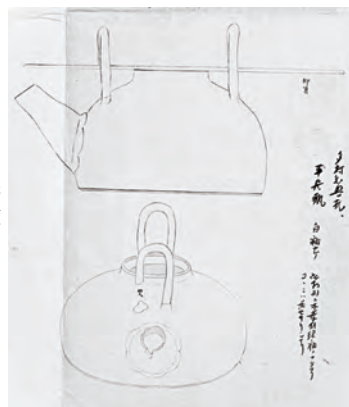
小津与右衛門様

貴下

猶急ぎ大乱筆。真平御用捨被遊度候。

† 武藤和夫 武藤和夫は元三重大学教授であり、三重県立図書館にはその旧蔵書が武藤文庫として収まる。武藤文庫は近世の三重県法制史関係のコレクションが大半を占めるが、そのなかに「小津久足自筆稿本」と題して、小津久足の紀行文・歌稿十三冊を一帙に収めた書物群が存在する（拙著『小津久

足の文事』三部三章「花鳥日記」へりかん社、二〇一六〕参照。  
十ひらるがめ 平居瓶。



「平居瓶・鳥頸瓶子図」(吉田静峯  
摸、大正四年。東京国立博物館所蔵、  
P-1212)。国立文化財機構所蔵品統  
合検索システム(<https://colbase.nich.go.jp/collection/items/tm/P-1212?locale=ja>)の画像からトリミングのうえ加工して掲載。

十豊岡様 豊岡治資<sup>はるすけ</sup>。公家。寛政元年(一七八九)生、嘉永七年(一八五四)没、  
六十六歳。正三位にいたる。久足は上京の折、しばしば豊岡家を訪問した。  
十四月展観 解題参照。

翻刻許可および画像提供を賜った三重県立図書館、本書簡の存在をご教示く  
ださった神谷勝広氏に心より御礼申し上げます。また、翻字に際して神谷勝広・  
早川由美・青山英正各氏のご助力を賜ったこと、併せて感謝いたします。なお、  
本稿はJSPS科研費(23K00320)による研究成果の一部である。

(日本文化論)

**One letter from Maruyama Mondo (Oryu)  
addressed to Ozu Yoemon.**

**Kenji HISHIOKA (Japanese culture)**

A transcribed letter from Maruyama Oryu to Ozu Yoemon (a merchant of Edo period), held in the Mie Prefectural Library.